道徳的偽善に関する研究

―Lammers（2012）の追試―

森永康子・阿部祐也・清末有紀・幸　千尋
小溝美湖・田島幸慈・中村真優

Do abstraction and power increase moral hypocrisy?

Yasuko Morinaga, Yuya Abe, Yuki Kiyosue, Chihiro Yuki,
Miko Komizo, Koji Tajima, and Mayu Nakamura

Lammers (2012) reported that participants taking an abstract (vs. concrete) view tended to judge the immoral behavior of others more severely than the same behavior performed by themselves (i.e., moral hypocrisy). In the current study, we examined the effects of construal level (i.e., abstract vs. concrete mindset) on moral judgments in a sample of Japanese university students. In addition, we examined the effect of the individuals' sense of power, which was previously found to influence moral hypocrisy (Lammers et al., 2010); people in powerful roles were found to be more strict in moral judgments of others' behavior than their own behavior. However, in Experiment 1, we did not observe moral hypocrisy. Instead, regardless of the actors in scenarios, we found that participants in the abstract condition (vs. concrete condition) judged immoral behavior less severely. Moreover, participants with a greater sense of power were more likely to judge immoral behavior severely. The discrepancy between the current findings and those of previous studies might be related to the scenario used in the current study (stealing a bike in a public bicycle parking area). Participants may have been influenced by the concern of being watched by a third party. We conducted Experiment 2 to investigate the effects of the presence of a third party, but found no significant effects. The results are discussed in terms of the construal level manipulations and immoral behavior in the experimental scenarios.

キーワード: moral hypocrisy, construal level, a sense of power

問　題

道徳性は多くの社会心理学者を惹きつけるテーマの一つであり，これまで多くの研究がなされてきた（e.g., Graham, Haidt, & Nosek, 2009; Haidt, 2012）。こうした研究の中には道徳判断がどのような要因によって影響されるのかをとりあげたものがあり，解釈レベルも検討されることの多い要因である（e.g., Eyal, Liberman, & Trope, 2008; Gamliel, Kreiner, & McElroy, 2016; Mårtensson, 2017 for review）。解釈レベル理論（construal level theory; Liberman & Trope, 1998）は，対象との心理的距離によ

って対象に対する捉え方が変わることを説明する理論であり，心理的距離が遠い場合には解釈レベルが高く抽象的なマインドセットになり，心理的距離が近い場合には解釈レベルが低く具体的なマインドセットになると考えられている。

道徳判断と解釈レベルについて検討した研究の中に，同じ行為でも行為者（自分か他者か）と解釈レベルによって判断が異なることを報告したものがある（e.g., Agerström, Björklund, & Carlsson, 2013; Lammers, 2012）。Lammers（2012）は，こうした自他の判断の差異を二重規範による道徳的偽善（moral hypocrisy）であると見なした。なお，道徳的偽善には，この道徳的二重規範（moral double standards）以外にも，道徳的に振舞いながらも自己利益を追求する道徳的欺瞞（moral duplicity），道徳的な価値と実際の行動が異なる道徳的弱さ（moral weakness）がある（Graham, Meindl, Koleva, Iyer, & Johnson, 2015）。

Lammers（2012）は，解釈レベルが低い場合つまり具体的マインドセットの時，人々は道徳ジレンマを引き起こす行為の細かい部分に注意を向けるため，その行為がどのように構成されているかを歪めることができない。従って，行為者がだれであろうと道徳的判断を変えない。しかし，解釈レベルが高い場合つまり抽象的マインドセットの場合には，細かい部分への注意が低減するために，行為を自分の望む方向に主観的に構成できるようになる。つまり，人は抽象的マインドセットの時には認知的に柔軟になり，自分の非道徳的行為を容認するが，他者の行為に対しては厳しい判断を下すという道徳的偽善を行うようになるのである。Lammers（2012）は解釈レベルの操作方法やジレンマ課題を変えた 4 つの実験を通して，具体的マインドセット条件では自他の道徳判断に差がないが，抽象的マインドセット条件では自他で判断が異なることを見出し，道徳的偽善を確認した。本研究では，Lammers（2012）の実験の追試を行い，解釈レベルによって道徳的偽善が生じるかを検討する。

また，Lammers は，道徳的偽善に関する他の研究（Lammers, Stapel, & Galinsky, 2010）で，勢力感（a sense of power）をとりあげている。裁判官や教師などのように高い勢力感を伴う役割についている人たちは，他者を裁く権利を持ち，他者が規則に従うことを要求できる。そのため，自己利益が追求できるようになると同時に，他者からの非難に対して鈍感になるため，道徳的規範を無視するようになる。こうしたことから，高い勢力感は特権意識（a feeling of entitlement）をもたらし，他者の行為を自分よりも厳しく判断するようになると主張した（Lammers et al., 2010）。こうした主張をもとに，彼らは，プライミングや役割付与により勢力感を高めるとそうでない場合に比べて，自分よりも他者の非道徳的な行為に厳しい判断を行うことを見出した。本研究では，個人特性として勢力感をとりあげ，その個人差を検討する。

研　究　1

方　法

実験計画　マインドセット（2: 抽象的 vs.具体的）× 行為者（2: 自分 vs.他者）の参加者間計画。

参加者　大学生 101 名から質問紙を回収したが，回答に不備のあった者などを除いた 93 名（男性 65 名，女性 28 名）を分析対象とした。平均年齢は 18.6 歳（$SD = 0.86$）であった。

手続き　講義開始前の時間を利用し，質問紙により実験を行なった。質問紙はマインドセットを操作するものと道徳判断課題を含むが，従来のプライミング研究と同様に，2 つの独立した研究を同時に実施しているという形をとった。カバーストーリーは，同時に 2 名の学生が調査を行うことになり，質問紙の配布回収の便宜のために 2 種類の質問紙を一緒に綴じたというものであった。調査はそれぞれ「大学生の生活に関する意識調査」「物語に対する評価についての研究」とし，それぞれの表紙に異なる実施責任者を記し，さらに，2 名の異なる学生(女性と男性)がそれぞれの研究目的を説明した。「大学生の生活に関する意識調査」はマインドセットを操作するもの，「物語に対する評価についての研究」は道徳判断課題であった。道徳判断課題を行なったあと，フィラーの 5 項目(「健康のため運動をしている」など)を挟んで，勢力感についての質問を行なった。最後に，年齢と性別を尋ねた。質問紙回収後に講義担当者からデブリーフィングを行なった。

マインドセット操作　時間的展望尺度(白井, 1994)から，抽象的マインドセット条件は将来に関する質問 5 項目(項目例：「私には，だいたいの将来計画がある」「私の将来は漠然としていてつかみどころがない」)に 5 件法で回答を求めた後，「将来あなたはどのような生活を送っていると思いますか。以下の質問に対し 10 年後の自分を思い浮かべ，回答してください」という教示のもと，「10 年後，あなたはどこに住んでいると思いますか」などの 3 項目の質問に対して，自由記述で回答を求めた。具体的マインドセット条件は現在に関する質問 5 項目(項目例：「毎日の生活が充実している」「毎日が同じことの繰り返しで退屈だ」)に 5 件法で回答を求めた後，「現在あなたはどのような生活を送っていますか。以下の質問に回答してください」という教示のもと，「今あなたはどこに住んでいますか」などの 3 項目に対して，自由記述で回答を求めた。

道徳判断課題　Lammers (2012)の実験 1 のシナリオをもとに，あなた(自分条件)もしくは A さん（他者条件)が大事な追試験に遅刻しそうになったため放置自転車を使って学校に行くという道徳判断課題を作成した（付録参照)。道徳判断は自分あるいは A さんの行動について「妥協できると思う」「良くないと思う」「やむを得ないと思う」「道徳に反すると思う」「仕方ないと思う」「許容できないと思う」の 6 項目で判断を求めた。回答は「まったく当てはまらない(1)」から「非常に当てはまる(6)」の 6 件法で求めた。

勢力感　Anderson, John, & Keltner (2012)の勢力感尺度をもとに，「他の人(友達，家族，サークルの知人等)との関係で，以下のようなことはどのくらい当てはまるか」といった教示を行い，「私は他の人に自分の言うことをきかせることができる」「私の考えや意見は無視されることが多い」「私は他者に対して大きな影響力を持っていると思う」「やろうとしてもやりたいようにできない」の 4 項目で測定した。回答は「まったく当てはまらない(1)」から「非常に当てはまる(6)」の 6 件法で求めた。

結果と考察

道徳判断及び勢力感について，それぞれ探索的因子分析を行なったところ，1 因子解が得られたため，それぞれについて項目の平均値を算出し，道徳判断得点(α=.895)及び勢力感得点(α=.739)とした(Table 1)。なお，平均値の算出にあたって，得点が高いほど道徳判断が許容的であり，勢力感が高いことを意味するよう変換した。勢力感得点に条件間の差異があるかどうかを 2（マインド

Table 1
各条件の平均値及び標準偏差（研究 1）

	道徳判断		勢力感	
	具体	抽象	具体	抽象
自分条件	2.85	3.35	3.24	3.38
	(1.02)	(1.35)	(0.78)	(0.90)
他者条件	2.83	3.11	3.25	3.52
	(1.25)	(0.90)	(0.77)	(0.71)

道徳判断は得点が高い方が許容的であり，勢力感は得点が高い方が勢力感が高いことを意味する。具体：具体的マインドセット条件，抽象：抽象的マインドセット条件。

Table 2
道徳判断を従属変数にした重回帰分析の結果（研究 1）

	β	p
マインドセット（0=具体, 1=抽象）	.205	.034
行為者（0=自分, 1=他者）	− .042	.664
勢力感	− .265	.005
マインドセット×行為者	− .039	.683
マインドセット×勢力感	.029	.757
行為者×勢力感	− .001	.992
マインドセット×行為者×勢力感	− .010	.916
R^2	.103	

セット）× 2（行為者）の分散分析で検討したところ，主効果及び交互作用に有意な結果は見られなかった（$F(1,89) < 1.551, p > .220$）。道徳判断得点を従属変数とし，マインドセット，行為者，勢力感及びそれらの交互作用を独立変数とする重回帰分析を行なったところ，マインドセットの主効果と勢力感の主効果のみが有意であった（Table 2）。マインドセットが具体的な場合よりも抽象的な場合において道徳判断が許容的であった。また，勢力感が高い者ほど，道徳判断が厳しかった。

Lammers（2012）は抽象的なマインドセットになると行為者によって道徳的判断が異なり，道徳的偽善が生じることを見出したが，研究 1 の結果はそれを支持しないものであった。しかし，抽象的マインドセット条件と具体的マインドセット条件では道徳判断が異なるという結果が得られているため，マインドセットの操作そのものは成功していると考えられる。また，勢力感が強い者ほど自分に対する道徳的判断が甘くなるという仮説も支持されなかった。

こうした結果の不一致は，本研究で用いた道徳判断課題の特徴によるのではないかと考えられる。本研究では，Lammers（2012）を参考に放置自転車を使用するという道徳判断課題を作成したが，Lammers（2012）の道徳判断課題は，自転車を盗まれた人物が新しい自転車を買うお金がないために，自転車泥棒によって放置されたと思われる古い自転車を拾って利用するというものであった。Lammers ら（2010, 2012）が研究を行ったオランダでは，転売を目的にした自転車の窃盗が多く，売れ

なかった自転車が道の脇に放置されていることがよくあるという。こうした自転車を発見者が利用することは違法であり，警察に届けなければいけないが，元の持ち主が見つかる可能性はほとんどないという。これに対し，本研究では，寝坊して試験に遅れそうな人物が，公共の場である駅の駐輪場で放置自転車を盗むというシナリオを用いた。こうした公共の場では第三者に目撃される可能性が大きい。そのため，シナリオを読んだ参加者の中で第三者からの評価懸念が高まり，道徳的偽善が生じなかったという可能性が考えられる。また，第三者からの評価懸念により，勢力感の高い人は低い人よりも，道徳的でなければならないという意識が働き，道徳的判断が厳しくなった可能性も考えられる。こうした解釈の妥当性を確認するために，第三者の存在の有無が道徳的偽善に及ぼす影響について検討を行うことにした。

研　究　2

方　法

実験計画　第三者の存在の有無の 2 条件。

参加者　大学生 77 名から質問紙を回収したが，回答に不備のあった者などを除き，72 名（男性 42 名，女性 30 名）を分析対象とした。平均年齢は 19.8 歳（SD = 1.22）であった。

手続きと質問項目　講義開始前の時間を利用し，「大学生の生活に関する意識調査」と称する質問紙により実験を行なった。道徳判断課題は研究 1 と同様のシナリオを用い，その中に「自転車置き場の近くには誰もいませんでした」という一文を加えることで，他者の存在の有無を操作した（付録参照）。道徳判断を求めた後，フィラーの 4 項目（「テレビを見るよりもネットをしている時間の方が長い」など）を挟んで勢力感を尋ねた。最後に，年齢と性別を尋ねた。質問紙回収後に講義担当者からデブリーフィングを行なった。道徳判断と勢力感は研究 1 と同じ質問項目を用いた。

結　果

研究 1 と同様に，道徳判断と勢力感について探索的因子分析を行なったところ，それぞれ 1 因子解が得られたため，項目の平均値を算出し，道徳判断得点（α = .910）及び勢力感得点（α = .792）とした。得点が高い方が道徳判断が許容的であり，勢力感が高いことを意味する。勢力感得点に他者存在の有無の条件による差異があるかどうかを確認したところ，有意な差は見られなかった（t (70) =

Table 3
各条件の平均値及び標準偏差（研究 2）

	道徳判断	勢力感
第三者無条件	3.04	3.39
	(1.11)	(0.93)
第三者有条件	3.26	3.71
	(1.16)	(0.86)

道徳判断は得点が高い方が許容的であり，勢力感は得点が高い方が勢力感が高いことを意味する。

Table 4
重回帰分析の結果（研究 2）

	β	p
第三者（0=無，1=有）	.087	.427
勢力感	.067	.664
第三者×勢力感	.038	.807
R^2	.015	

1.543, p = .127; Table 3）。道徳判断得点を従属変数，第三者の存在の有無と勢力感及びその交互作用を独立変数とする重回帰分析を行なったところ，道徳的判断を有意に予測する結果は得られなかった（Table 4）。

研究 1 で道徳的偽善が生じなかった原因は，公共の場で自転車を盗むという場面を用いたことで，第三者からの評価が予期されたためではないかと考えた。そこで，シナリオの中に第三者がいないことを明記し，評価懸念が高まらないようにした。しかし，こうした第三者の存在は道徳判断に影響を及ぼさなかった。また，研究 1 で勢力感が高い者ほど道徳判断が厳しいことが示されたのは，勢力感が高い者は低い者よりも，他者の存在に敏感であるためではないかと考えた。しかし，この点についても確認できなかった。

総 合 考 察

本研究は，道徳的偽善を解釈レベルによって説明した Lammers（2012）の追試に加えて，勢力感の影響を検討した Lammers et al.（2010）から示唆を得て 2 つの研究を行った。研究 1 では，解釈レベルと勢力感のそれぞれによって道徳判断が異なるという結果を得たが，いずれも仮説とは一致しないものであった。研究 2 では，研究 1 の結果を解釈するために，第三者の存在という要因を加えて検討したが，第三者の存在は道徳的判断に影響を及ぼさなかった。さらに，研究 1 で見られた勢力感の主効果も再現されなかった。研究 1 と 2 の参加者の勢力感はそれほど大きな差はないため（t (164) = 1.659, p = .098），研究 2 で勢力感の効果が見られなかったのは，解釈レベルの操作がなかったためという可能性が考えられる。本研究では，抽象的マインドセット条件も具体的マインドセット条件も，現在または将来の自分自身について考えることでマインドセットの操作を行なった。研究 1 で見られた勢力感の効果はこうした自身に向き合うという操作によってもたらされたものかもしれない。

また，本研究で用いた道徳判断課題のシナリオは，試験の日に寝坊して遅刻しそうになった人物を描いたものであった。前述したように，Lammers（2012）の用いた道徳判断課題では自転車を盗まれた人物が描かれている。この人物は盗難の被害者であり，この盗難に関しては本人に過失はない。そして，犯罪被害者になったことで自ら犯罪を犯すことになった。これに対して，本研究のシナリオは，インフルエンザで試験を受けられなかったことは本人の過失ではないものの，追試の日に寝坊したという落ち度があった。このことが本研究で道徳的偽善を生み出さなかった可能性がある。今後は，道徳判断課題を変えて，道徳的偽善について再検討する必要があるだろう。

引用文献

Agerström, J., Björklund, F., & Carlsson, R. (2013). Look at yourself! Visual perspective influences moral judgment by level of mental construal. *Social Psychology*, *44*, 42-46.

Anderson, C., John, O. P., & Keltner, D. (2012). The personal sense of power. *Journal of Personality*, *80*, 313-344.

Eyal, T., Liberman, N., & Trope, Y. (2008). Judging near and distant virtue and vice. *Journal of Experimental Social Psychology*, *44*, 1204-1209.

Gamliel, E., Kreiner, H., & McElroy, T. (2017). The effect of construal level on unethical behavior. *Journal of Social Psychology*, *157*, 211-222.

Graham, J., Haidt, J., & Nosek, B. A. (2009). Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations. *Journal of Personality and Social Psychology*, *96*, 1029-1046.

Graham, J., Meindl, P., Koleva, S., Iyer, R., & Johnson, K. M. (2015). When values and behavior conflict: Moral pluralism and intrapersonal moral hypocrisy. *Social and Personality Psychology Compass*, *9*, 158-170.

Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. London: Vintage.（ハイト, J. 高橋 洋 （訳）(2014)． 社会はなぜ左と右にわかれるのか―対立を超えるための道徳心理学　紀伊国屋書店）

Lammers, J. (2012). Abstraction increases hypocrisy. *Journal of Experimental Social Psychology*, *48*, 475-480.

Lammers, J., Stapel, D. A., & Galinsky, A. D. (2010). Power increases hypocrisy: Moralizing in reasoning, immorality in behavior. *Psychological Science*, *21*, 737-744.

Liberman, N., & Trope, Y. (1998). The role of feasibility and desirability considerations in near and distant future decisions: A test of temporal construal theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, *75*, 5-18.

Mårtensson, E. (2017). Construal level theory and moral judgments: How thinking abstractly modifies morality. *Journal of European Psychology Students*, *8*, 30-40.

白井利明（1994）．時間的展望体験尺度の作成に関する研究　心理学研究, *65*, 54-60.

付記

本論文は，2017 年度に広島大学教育学部で開講された心理学課題演習において，第 1 著者の指導により第 2 著者から第 7 著者までが実施した研究をもとに執筆したものである。研究の一部は第 2 著者から第 7 著者により中国四国心理学会第 73 回大会学部生研究発表会において報告された。

付録

本研究で用いた道徳判断課題

あなた（A さん）は，インフルエンザにかかってしまい，ある大事な試験を受けることができませんでした。担当の教員に連絡し，その追試験を受けさせてもらうことになりました。しかし，あなた（A さん）は追試験の朝，寝坊をしてしまいました。電車に乗って学校の最寄り駅に着いた時には，試験に間に合うかどうか微妙なところです。ふと自転車置き場に目をやると，鍵のかかっていない一台の自転車が目に入りました。その自転車には一ヶ月以上放置されたものであるという印があります。自転車置き場の近くには誰もいませんでした。どうしても試験に間に合いたいあなた（A さん）はその自転車を使って学校に向かい，試験を受けることが出来ました。

注）下線部は研究 2 で追加した部分である。